

第4回中心市街地のグランドデザインを考える分科会記録

日 時 平成21年9月11日(金) 19:00~21:00

場 所 小田原箱根商工会議所 4階 相談室

経 過

前回に引き続き、どのようなやり方でグランドデザインを作っていくか、自治会の区分けをされたマップ(防災マップ)を見ながら出席者により意見交換がされた。

意見交換により、どこがどう成り立ち、どう変遷してきたかが見え始めた。当時に戻すのは時代の流れとともに変わっているため難しいが、背景をもちながら、今はどうしていくのか・・・としてやっていくこととなった。

今回の勉強会の結論としては、各々のポイントの魅力や特徴について、対等に全てが出せるようにする必要があるということ、次回の9月18日に向けて、各ポイントの特性(売り)について個々に考えてくることとなった。

ポイントは①特性を持つとされる「山王」「寺町」「板橋」「松原神社周辺」。これらのポイントについて、それをどう考えていくか。②それ以外の場所については、各自自由にポイント付けをし「これはこうしたら」というものを書いていただく。今後はそれらを下地にして絵を描いていく作業に移行することとなった。

<主な意見>

【全体的なエリア・グランドデザインの描き方について】

- ・グランドデザインのエリアは早川から山王川の間で考えたい(約170ha)。この中でスポットの洗い出しができれば。
- ・お寺の多い寺町も、やり方によっては一つのスポットとして再開発できるのではないか
- ・特徴のあるスポットを皆で洗い出せたら
- ・城下町の後背地は足柄・酒匂平野だった。よって井細田の街を持ちながら、小田原の市街地が発展した。小田原は物販も多いけれど職人町
- ・街かど博物館ともリンクさせながらやっていけたら
- ・江戸時代初め、将軍秀忠が小田原城を隠居の城にしようとしていた。明治になると御用邸。よって、城のある街、いわば風雅を売りにすることと思う。
- ・グランドデザインの指標として、「小田原で一日楽しめるのか」というのがある。一日楽しめる小田原にするにはどうしたら良いのかを考える。(面で考えていく)
- ・街の中で、別荘地等の綺麗な風景があった。一部だけでも「こうなったらこうなる」というイメージを作るのは将来の街づくりに向けて大きな触媒になると考えている。(種を植えるともいえる)
- ・ここはこういうものだという軸を置くことは重要。
- ・歩いていて楽しいところには必ず花と水がある。
- ・町の結節点だったところを調べて方針を出していくのが大事。
- ・魅せられる町として、電線地中化や歩道・路肩のデザイン、街路樹等がある(アーバンファニーチャー)←現在はあまり進んでいない。広告制限もある。街に散らばる要素をデザインしていくことで綺麗になるし、地域が入ればなお良い。
- ・お客様をいかに集めるために、「ここにこういうものがある」というのをベクトル付けして

いくよう進めていったらよい。

- ・やり始める順番として、最初に「こうしたら～」という大まかな絵を描いて、歴史や具体的なことなどで落とし込んでいく・・・どうしても核の話に入りがちになってしまう。
- ・地域連絡協議会が立ち上がるが、小田原を25に分けて各地区で自分たちの地域は何を作っていくのかを話し合うことになっているが、代表の方もそれを決めるための指標がない。「こういうのができれば素敵ですよ」というものが示せば、それに向かって進んでいくのではないか。その元をここで作ることができるのではないか。
- ・「寺町」「井細田」「山王」「小八幡」「板橋」は道の駅だった(宿場町とは異なる)

【小田原城の大外郭エリアについて】

- ・「寺町」「板橋」「山王」「小八幡」小田原城の大外郭の中であってちょうど入り口の所に一つの商業地があった。(見附の外に)
- ・かつては山王川を挟み、小田原城の大外郭を形成していた。
- ・「板橋」「山王」「昔の城郭」小田原城は昔の要塞のため出入り口は小さい。その他の街、中心部を結ぶ結節点になるのではないか。結節点がある程度整備していくのは広域で(グランドデザインとして)考えるには必要な作業と思う。3つの結節点をキャラクター付けしてどうしていくのか。後ろに控えた背景や人の生活を考えていく。
- ・小田原城の昔の外郭を再現することは難しいが、人に認知してもらえよう、街路樹を大外郭跡に植樹できないか。(キャスビー(*)街づくりの観点においても)
*キャスビー「CASBEE」(建築物総合環境性能評価システム)は、建築物の環境性能で評価し格付けする手法である。2001年に国土交通省の主導の下に、(財)建築環境・省エネルギー機構内に設置された委員会において開発が進められている。
- ・大外郭についても、それを広く示すためにアスファルトにラインを引くことも出来ないか。知らしめることで気運を高めることができないか

【松原神社周辺について】

- ・本町(幸・本町)真田の町(蒲鉾等の町)と一緒にいる。また、旧東海道もこの辺りを通っていた。旧東海道に沿って万年町(万町)があった。
- ・旧東海道の蒲鉾屋通りには魚の鈴木ヒロオさんの本宅が出来、政財界の人たちの取引(談合)があった。中田屋の肉屋や芹沢の質屋もあった。この通りは明治の一時期に中心街だった。魚市場もあった。
- ・江戸時代の繁華街は本宿にあった。明治になってからは、魚を取引する商業力が強くなった。海岸線の通りには高級別荘があり、今でもその土地は残っている。
- ・宿場町と購買層の結節点が松原神社を中心とした、新宿で言う歌舞伎町。甲州道を来た人たちが寄り合う場所になった。(駅の機能がここにあった)
- ・幕末には外郎の裏通りには遊郭があった。(お城のすぐ前の遊郭)そこにあった遊郭が明治になり松原神社付近へ移っていった。
- ・松原神社はここが山王との入口で、寺町があり、板橋があり・・・の結節点になっている。そういった意味では、ここが整備できると城郭の入口がつながってくる。山王川の側道が整備できれば川沿いでつながっていくことも良い。中身については込み入っているので、スケールを落として面ではなく線として見ていくと良い。

- ・このエリアの中においては、今後人口減少により空きが出てくる部分もある。そういったときに、しっかりとしたポケットパークの様なものが作られるかというのが、街が生き続けられるかどうか。
- ・小田原の海とのつながりの風土。松原神社近辺はそれを演出できる。小田原は海とともに栄えた。
- ・籠清さんの海側に神社がある、その他にも周辺にお稲荷さんは多い。そういうのも注目してみたらどうか。
- ・宮小路に道の駅のようなものができたら面白いのでは(夢のような話だが)
- ・この結節点はロケーションとしても重要
- ・予算が許せば、宮小路に柳の木を幾つか植樹して、芸者の看板を立てても面白いかもしれない

【山王・西湘バイパス周辺】

- ・大工町通り～西湘バイパスの北側をどう考えるか。この地域は小田原の木工(箱根細工)の職人街だった。今はIT関連企業が入り込んでおり、伝統産業と先端産業の今夕がある街。
- ・山王・網一色は商店街は衰退してしまっているが食堂の多い地域。
- ・上下完全ICになると小田原の中核性が非常に明確になり、また、山王川を挟んで良い住宅地になり価値が上がると思われる。
- ・新開地と新地は別。保健所も山王見附のところにできた。神奈中ボウル周辺にも大きな女郎屋があった。
- ・西湘バイパスの河口下をどう使うか。小田原が海を感じない最大の要因には西湘バイパスがある。西湘バイパスとが分断している小田原と海の間を、これを活かしつつ、どうやってやるかは大きな挑戦。
- ・西湘バイパスと明治35年頃の堤防その後、砂浜になり、雑草地になり・・・あの空間をどのように活かすか。かつてはあそこには松があった。そこが一番さわり易いのでは
- ・海岸がすぐそばにあるのはメリット。しかし年々海岸が狭まっている。西湘バイパスもいつ崩れてしまうか心配。
- ・バイパスと昔の堤防との間は殆どなく、近所の人々が畑を作るぐらいのスペースしかない。場所によっては、堤防の金網とバイパスが接触している。
- ・酒匂の河口と早川の河口にはサーファーが来る。特に酒匂の加工は日本でも有数の良い波がくるといふスポットにもなっている。(認知度としては低い)

【井細田・中町・寿町周辺】

- ・井細田の商店街は足柄平野をバックに開けていた。井細田は小田原の農業マーケットだった。
- ・井細田・中町・寿町3丁目は工業から宅地に変化している。今後を見据えた際にチャレンジな地域。
- ・お役所的に商業の商圈を考えた場合に、中小の工業や住宅化、このエリアのもつ底力は小田原の大きな潜在力
- ・寿町は昔は材木屋が多く、木工屋も多くあった。

【大工町周辺】

- ・大工町のところにゴマドウ川があり、お城の水が流れていた。小田原の駅前には小田原では一番標高が低く、その中でも大工町が最も低い。
- ・足利時代はアンコク寺というお寺があった。また、錦織(にしごり)神社もあった。ここは港町でその川が運河の機能をはたしていたので、大工町を中心に、生活用品マーケットになっていた。

【板橋周辺について】

- ・板橋見附から南町を回ってシンカワという用水堀りがある。その路線は明治の文学者が別荘を持っていた。昔はそこは舟揚げ場の機能もあった。

【旧 甲州道について】

- ・銀座通り・国際通り・台宿・一丁田・青物町・・・は甲州道
- ・国際通りが栄えた理由は、松原神社があり、その周りに花柳街があった。いわば小田原の歌舞伎町だった。また、明治時代には米の取引所もあった。
- ・終戦後、銀座通り、国際通りという名前ができた。駅に近かった。(現在の駅舎は材木置き場だった)
- ・国際通りが栄えたのは昭和20年後半から30年代(通りが出来たのは明治16年)。銀座通りは昭和40年代。
- ・銀座通りは小売商店。国際通りは卸売が多かった。小田原の商店の多くは問屋小売で兼業している。お店の間口・奥行きが大きい。また、店舗内には従業員宿舎もあり、国際通りには作業場もあった。現代ではアパート化してしまっている。
- ・ワンルームマンションが乱立しているので町のコンセンサスが取りにくい。
- ・国際通りは大きな話になるが、対面通行にし、別の利用をすることによって、他の利用価値が上がることもある。

【十字町について】

- ・十字町は昔の貴族屋敷が中心。

【小田原駅・お城周辺について】

- ・小田原は海がなくなり、浜も川もなくなった。ついには、本丸広場で産業まつりを開催。ついにお城を喰い物にするようになったと思った。(苦情をしたら二の丸広場に移動したが)
- ・お城通りの再開発においては、ある程度広場を作ろうというのが案として出ている。そうなれば、人の集い方も変わってくる。
- ・お城の広場はどちらかというと、お寺の境内的な広いだけの空間。ヨーロッパの街の中心になっている広場とは違う。本当の市民のためのシビックアートにはならない。
- ・市民ホールの予定地付近には家老の隅大久保屋敷には小堀遠州作の心字池があり、その残骸が残っている。本丸や二の丸広場には日本庭園がない。心字池を再現して、小堀遠州風の茶室、家老屋敷の復元として日本庭園を造ると、市民ホールの南側に非常に訴求力のあ

るホールになるのでは。「国道から小田原城を見せる」というだけで隠れた遺産を駄目にしてしまうのは問題があるのでは。

- ・大正9年に今の小田原駅ができ、道の形が変わり、商店者の出店が起こった。

【商店街・商業について】

- ・60年代～80年代(90年代は)には、商店街診断をやっており、歩行量調査もあった。
- ・機能不全に陥っている商店街はたくさんあるのはご理解いただきたい。
- ・商店街を復活させるかの話になった時に、商店街だけだと無理なので、自治会としても店を作る・・・といった持って生き方をしないと不可能。
- ・商店街については、ある程度の規模を考える程度で良い。中身については別の分科会でやっている。
- ・住んでいる人からしたら近くに最寄品が帰るのが望ましいが、外から来た人が感じる魅力はもう少し色々な特徴があるものにある。(住んでいる人からしたら使いにくい)住宅街ができれば自然発生的に小さなスーパーができてくるようになるので、商業としての計画の中では最寄品の店舗については考える必要はない。

【小田原用水について】

- ・現実的に費用がさほどかからずに水路を復活させる個所があれば、この中で一部やるというの、種を植える上で重要。次に手がけるところがそれに倣ってやることもある→連鎖。そこに住む自治会の方や住民の方たちにそのコンセンサスができてくれば、そちらの方向に向かっていく。
- ・小田原の用水路は水道として用いられていた。上下水道が発達すると不要になり、またコレラが流行した際に街の水路は望ましくないものとされてしまった。

【色彩の規制について】

- ・色彩の規制は出来ないのか(京都などではコンビニエンスストア等の色彩が規制により通常と異なっている)
- ・彩度で規制をしているが、エリアによってはもっと絞ったり・・・ということもあろうが、現段階ではコンビニエンスストア等には適用されていない。

【地域コミュニティについて】

- ・土地の価値を上げようとするには学校の地域開放が必要。学校を地域のコミュニティの核とし、あまったスペースの開放・利用させ、地域に還元させることは結果として地域のレベル向上に繋がる。(学校が良いと人が住みたくなる)
- ・現在新玉小は1クラスあるかないかになってしまっているの、考えていかないといけない。山王小もソフトボールのチームが作れないほどになっている。
- ・今回は中心市街地の活性化ということで、念頭には経済産業省があるので、学校となると省庁が違ってきてしまう。学校ではなく、居住(コミュニティ)の切り口で行った方が良い。

今後の実施日については、全体会が9月18日(金)、分科会は10月6日(火)(10月9日(金)が変更)、11月9日(月)。10月の全体会は9月18日に決定する。

以上

<当日出席者> *順不同・敬称略

櫻井泰行、小野意雄、金井俊典、永峰康次、平井義人、早瀬幸弘